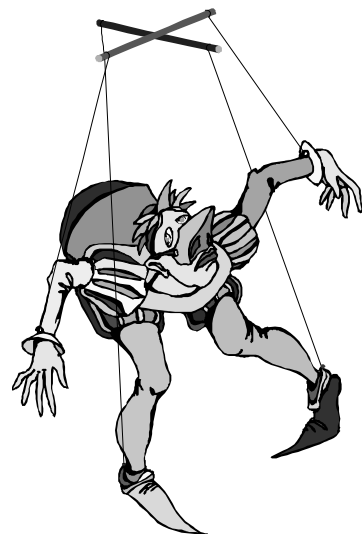


傀儡

～ある操り人形のこと～

ある日、ふと、操り人形は思いました
「どうして、自分は上から糸で吊り下げられているのだろう？」
そして、気づいてしまったのです。
「だから、自分の思いどおりには動けなかったんだ」
この発見に、操り人形はとっても喜びました。
「よし、この糸さえなければ……」
操り人形は思うが早いか、その糸を全て断ち切ったのです。
「さあこれで自分は自由だ、なんだってできるんだ！」
けれど、操り人形は、その糸を切った瞬間、自由になったと思った瞬間、その身の動きがなくなりました。
「あれ……動けない、よ」
思うばかりの操り人形は、操られなくなった代わりに、もう動くことができなくなったことを、知り、泣きました。



～また、ある操り人形のこと～

操り人形は常々不満に思うことがありました。
「どうして、自分の思うままに動けないんだろう」
そしてかねてから計画していたことを、その日、遂に決行したのです。
「ぼくは、そっちに動きたいんだ！」
上から吊り下がる糸の動きの反対に、操り人形は動きました。
「よし、動ける、動けるぞ！」
自信をつけた操り人形は、ことごとく糸の動きと反対に動いたのです。
「これこそ、自分の思うがまま、自由なんだ」
操り人形はとっても喜びました。
「次はこっちに行くぞ」
しかし、そう操り人形が思った瞬間、その身の動きは、なくなりました。
「あれ……動けない、よ」
思うばかりの操り人形は、無理に動いたばかりに糸が全身に絡まってもう、動くことができなくなったことを知り、泣きました。

～そして、ここにもまたある操り人形のこと～

操り人形は、ずっとずっと思っていました。
「動きたいよ」
そうなのです、操り人形は今まで一度たりとも動いたことがなかったのです。
「どうすれば、動けるのだろう」
自分につけられている糸をじっと見て、その意味を探る毎日がずっと続いていました。



「ぼくはぼくだけの力じゃ、動けないのだろうか」
はたと、操り人形はその糸の理由に気づきました。
「そうか、ぼくを操る誰かがいいじゃないか！」
操り人形はとっても喜びました。
「誰か、誰かいいいの」
思うばかりの操り人形は、いつか誰かが自分を動かしてくれるその日を待って、ただただその日を楽しみに、今日も待っています。

おしまい